又出て行くのである。さらば、柚ノ木の祖母よ、父よ、母よ。さらば、亀山よ、臥龍よ。私達親子三人は肱川を下りに下つて夕方長濱に著いた。愈〻長濱に着くといふ頃には川幅が廣く、灰色に煙つた川の面が遠く何處までも續いてゐた。「もうこの邊は海だ」と教へられたものの、それでも海の概念は得られなかつた。岸には船の數が、殆んど數へきれない程であつた。舟から上つて、安田旅館とかいふ宿屋で夕食をすませ、夜中に、ねむい眼をこすり、こすりギィギィ櫓の音をきゝ乍ら、寒い夜風にふかれて、港の外に何か騒がしく足ぶみでもしてゐるやうな眞黒な船に近づいて行つた。宿屋の番頭が提灯をもつて送つてきた。親戚の人か誰かも來た。海の香もかいだ。汽船の油の香、ペンキの香も初めて知つた。すべてが新しい世界だつた。乗船すると、そこには宇和島から乗つて來た廸兄がゐた。不思議な氣がしたが、うまく打合せがしてあつたのであらう。ガラガラガラ、眞夜中の海に碇を卷く音、呼び子の音、やがてピストンの音、スクリュウの音、そして、さよならの汽笛が、長濱の港外に響いて、船は東を指して進んで行く。船は大阪へ！そして吾々親子四人は何處へ！

馬車屋

「そこんとこ、あいてるんぢやねえか」

道端の男が聲をかけた

「いゝや、あいてねえ」馬車屋は答へた、

鞭ふりふり、車を速めて。

「ヂューンや、おめえはあの世へ行つたつて人は云ふが、

ちやんとおいらの側に一緒にゐらあ、な」

かう云つて、自分の隣にあけてある

席の方へ眼をやつた。

すると、乗つてゐる連中は小聲で、

「何處へ行くにも、おかみさんが一緒に

あそこに坐つてゐたが、空つぽになつてから

もう、すゐぶん久しいもんだ」

ガラゴロ、ガラゴロ馬車は走つた、

シドウェル教會の脇を通つて

イークスン砦も見えなくなつた。

日もとつぷり暮れてしまつた。

——トマス・ハーディ——